

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第196号

イザヤ 65:1

平成24年1月27日

わたしは預言者たちに語り、多くの幻を示し、預言者たちによってたとえを示そう。 ホセア書 12:10
もう一つのたとえを聞きなさい。ひとりの、家の主人がいた。彼はぶどう園を造って、垣を巡らし、その中に酒ぶねを掘り、やぐらを建て、それを農夫たちに貸して、旅に出かけた。さて、収穫の 때가近づいたので、主人は自分の分を受け取ろうとして、農夫たちのところへしもべたちを遣わした。すると、農夫たちは、そのしもべたちをつかまえて、ひとりには袋だたきにし、もうひとりには殺し、もうひとりには石で打った。そこでもう一度、前よりもっと多くの別のしもべたちを遣わしたが、やはり同じような扱いをした。しかし、そのあと、その主人は、『私の息子なら、敬ってくれるだろう』と言って、息子を遣わした。すると、農夫たちは、その子を見て、こう話し合った。『あれはあと取りだ。さあ、あれを殺して、あれのものになるはずの財産を手に入れようではないか。』そして、彼をつかまえて、ぶどう園の外に追い出して殺してしまった。この場合、ぶどう園の主人が帰って来たら、その農夫たちをどうするでしょう。」彼らはイエスに言った。「その悪党どもを情け容赦なく殺して、そのぶどう園を、季節にはきちんと収穫を納める別の農夫たちに貸すに違いありません。」

イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、次の聖書のことばを読んだことがないのですか。『家を建てる者たちの見捨てた石。それが礎の石になった。これは主のなさったことだ。私たちの目には、不思議なことである。』だから、私はあなたがたに言います。神の国はあなたがたから取り去られ、神の国の実を結ぶ国民に与えられます。また、この石の上に落ちる者は、粉々に砕かれ、この石が人の上に落ちれば、その人を粉みじんに飛ばしてしまします。 マタイ 21:33-44

知恵のある者はだれか。その人はこれらのことを悟るがよい。悟りのある者はだれか。 ホセア書 14:9
神ヤーウェはカナンの地にご自分のぶどう畑を持たれました。聖書では一貫して、イスラエルは「ヤーウェのぶどう畑」で、イザヤ書5章の「ぶどう畑への愛の歌」には、神のイスラエルに対する深い愛が切々と語られています。冒頭のキリストのたとえの背景には、この歌が反映されているのです。

預言者イザヤは、神がご自分の民に必要な最善を尽くされたことを、ラップ・ソングの形式で、民に訴えました。『さあ、わが愛する者のためにわたしは歌おう。そのぶどう畑についてのわが愛の歌を。わが愛する者は、よく肥えた山腹に、ぶどう畑を持っていた。彼はそこを掘り起こし、石を取り除き、そこに良いぶどうを植え、その中にやぐらを立て、酒ぶねまでも掘って、甘いぶどうのなるのを待ち望んでいた。ところが、酸いぶどうができてしまった。そこで今、エルサレムの住民とユダの人々よ。さあ、わたしとわがぶどう畑との間をさばけ。わがぶどう畑になすべきことで、なお、何かわたしがしなかったことがあるのか。なぜ、甘いぶどうのなるのを待ち望んだのに、酸いぶどうができたのか。さあ、今度はわたしが、あなたがたに知らせよう。わたしがわがぶどう畑に対してすることを。その垣を除いて、荒れすたれるに任せ、その石垣をくずして、踏みつけるままにする。わたしは、これを滅びるままにしておく。枝はおろされず、草は刈られず、いばらとおどろが生い茂る。わたしは雲に命じて、この上に雨を降らせない』(イザヤ書5:1-6)。ぶどう畑の主、神によって良い種の蒔かれたぶどう畑は「神の相続分」で、神はよい実がなるのを心待ちにされました。神はご自分の民に、全人類の長子としての特権と祝福を与え、これ以上の方法はなかったと断言されるほどの最善を尽くされたのです。「神の証人」として選ばれたイスラエルの役割は、よい実を結ぶこと、すなわち、全世界に素晴らしい神、全人類の唯一真の神を告げ知らせ、祝福を分かち合うことでした。神はぶどう畑の管理をイスラエルの王に任せられました。しかし、歴代の王は神の御旨に逆らってぶどうの世話をせず、私欲に生きたのです。邪悪な管理人、背信の王たちは、ぶどう畑の主、義なる「神」を投げ捨て、異邦人の偶像の神々に仕え、ぶどう畑を着服したのです。

イザヤ書の続く8-23節には、六つの災いのことば「忌まわしいものだ」(邦訳では「ああ」で始まる非難の言葉)が列挙されていますが、神はイスラエルに蔓延した物質主義、快樂主義、罪の容認、神の言葉に対する軽視と侮り、相対主義、不正と不義への迎合と良心の麻痺を非難されました。真理をゆがめ、自らを神とし、真の神を嘲弄しているとわなないユダの指導者や民、「悪を善、善を悪と言っている者たち。彼らはやみを光、光をやみとし、苦みを甘み、甘みを苦みとしている」墮落したイスラエルを、神はついに異邦人を送って裁くことを告げられました。異邦人がご自分の愛するぶどう畑を襲い、踏み荒らし、略奪し、破壊することを許されたのです。聖書では「異邦人」に象徴されているのは、神と神の民イスラエルの敵で、異邦人の偶像を恋い慕い、真の神を捨て、靈的姦淫に陥ったイスラエルは、皮肉にも自分の恋人、一異邦人一に裏切られることになるのです。24-30節には、「万軍の主のみおしえをないがしろにし、イスラエルの聖なる方のみことばを侮った」者たち、一民

を惑わす者、この世の知恵を誇る者、酒豪を競う者、収賄する者—が、容赦ない神の裁きによって滅びることが記されています。「ぶどう畑」に象徴される神の民であっても、反逆、背信の民は、「犬ども」、一汚れた異邦人を象徴—にむさぼられ、無残な最期を遂げることは、特に背信のイスラエルの王アハブとその妻イゼベルの死に象徴的に物語られています。

アハブは、フェニキアの王女イゼベルとの結婚により、イスラエルにヤーウェ崇拝の危機をもたらした王でした。イズレエル人ナボテはアハブの王宮のそばにぶどう畑を持っていましたが、先祖の譲りの地を王に譲渡することを拒んだナボテを、イゼベルは邪悪な手段で殺し、アハブはイズレエルのぶどう畑を横領したのです。預言者エリヤはこのような非道な仕打ちをしたアハブに対し、「**主はこう仰せられる、犬どもがナボテの血をなめたその場所で、その犬どもがまた、あなたの血をなめる**」との神の言葉を告げ、イゼベルに対しても、「**犬がイズレエルの領地でイゼベルを食らう**」と預言したのです。その後、アラムとの戦いで傷を負い戦車の上で死んだアハブは首都サマリヤに運ばれ、その血にまみれた戦車は池で洗われたのですが、そのとき、犬がアハブの血をなめたのです。凶らずも、アハブの血はサマリヤの軽蔑された遊女と犬どもが水浴びをする池に混入されたのですが、「遊女」や「犬」同様に扱われるという二重の呪いで一生を終えたアハブの最期は、まさにエリヤの預言の見事な成就でした。同様にイゼベルも、アハブの子ヨラムに対し謀反を起こした軍隊長エフーに命じられた家来に、窓から突き落とされて屈辱的な最期を遂げました。イゼベル殺害後、エフーと家来が祝宴を交わした後、イゼベルを葬るため外に出たときには、彼女の遺骸は頭蓋骨と両足、両手首以外は残っておらず、まさにエリヤの預言「**イズレエルの地所で犬どもがイゼベルの肉を食らい、イゼベルの死体は、イズレエルの地所で畑の上にかかれた肥やしのようになり、だれも、これがイゼベルだと言えなくなる**」が見事に成就したのです。

ホセアは、列王記第一 21 章から列王記第二 9 章にかけて記されているイズレエルのぶどう畑に起こった惨事、イスラエルの恥ずべき不祥事を神の民に思い起こさせ、主の「ぶどう畑」を正しく管理せず、流血で主の地を汚したイスラエルの王アハブと王妃イゼベルに下った厳しい裁き、また、アハブ王朝断絶の預言の成就から学ぶことなく、依然として背信路線を走り続けていた北イスラエル王国に、ついに王国が取り除かれる日が来ることを告げた預言者でした。アハブ王朝の後、イズレエルで統治を始めたエフーの王朝もヤロブアム二世の死で終わり、その後、北イスラエル王国の首都サマリヤ陥落までの三十年間は、相次ぐ王位剥奪の革命でさらに多くの血が流され、北イスラエル王国は「イズレエルの血」から引き継がれた墮落した王国のまま終焉したのです。イザヤの「ぶどう畑への愛の歌」とイスラエル史自体に反映されているように、イスラエルの中の邪悪な者たちは正しい民や神の送られた預言者たちを殺し、ぶどう園を横取り、放縦に身を任せたのです。義なる神はご自分の所有地をそのような邪悪な民に相続させるおつもりはありませんでした。そこで、神は、異邦人の圧制者にご自分の民を懲らしめる門戸を開かれ、民は国を失い、諸国民の地に捕囚に移されたのです。北イスラエル王国には異邦人アッシリヤが送られ、その百三十五年後には、北イスラエルの滅びから学ばなかった南ユダ王国にバビロンが圧制者として送られ、エルサレムも陥落したのです。しかし、ホセアは、北イスラエルと南ユダに対して、ご自分の民に対する神の恐ろしい裁きから教訓を学ばない者の上に神の裁きが下ることを告げただけでなく、選びの民に対する神のはかり知れない「とこしえの愛」をも語った預言者でした。ホセアの遠未来預言は、自分の長子につけられた名「**イズレエル**」の意が、神が「裁きを蒔く」の意から、神が「祝福を蒔く」の意に変えられる日が到来すること、言い換えれば、神が「イズレエルの血」の復讐を異邦人にされる「ハルマゲドンの戦い」の日の預言にも及んでいます。神はさらに、ホセアの別の二人の子につけられた否定的な名をも完全に換えられ、肯定的な名「愛されている」、「わたしの民」に変えられる日が来ることを預言されたのです。ホセアは、はるか時代を越えた未来、「**ユダの人々とイスラエルの人々は、一つに集められ、彼らは、ひとりのかしらを立てて、国々から上って来る**」メシヤの時代、「**イズレエルの日は大いなるものとなる**」と予告しているのです (1: 11)。

キリストは冒頭に引用した「ぶどう園のたとえ」で、イエスを、ユダヤ人のメシヤ、一父なる神が預言者を通して語って来られた最大の約束、ダビデの血筋の王、神の「**息子**」、「**あと取り**」—として受け入れようとしなかった当時の宗教指導者たちに、このイスラエル史の非劇「イズレエルのぶどう畑に起こった惨事」を思い起こさせられたのです。神はご自分の重大なメッセージを民に悟らせるために、預言者を通して、言葉で、あるいは、ビジョンで、あるいは、たとえて語られましたが、しかし、心を頑なにした祭司長、パリサイ人たちは、「たとえ」で語られたキリストのメッセージを聞かず、それどころか、キリストを捕らえようとしたのです。神の言葉から悟ろうとしなかった西暦一世紀のユダヤ人は、まさにキリストのたとえの中の邪悪な農夫で、イスラエル史の非劇から学ぶことなく、神が送られたメシヤをついに十字架に追いやり、殺してしまったのです。神の御旨は、神の民、異邦人に関わらず、究極的には「**神の国の実を結ぶ国民に**」御国を相続させることで、エルサレムはキリストの予告通り、西暦七十年にローマ人の手に落ち、以来、今日に至るまで、「神のぶどう畑」イズレエルの地に象徴される聖地はまだ完全にはイスラエルに戻されておらず、ホセアの遠未来預言はまだ成就していません。したがって、たとえに秘められた重大なメッセージを悟った者は、二千年前、背信の神の民「**家を建てる者たち**」が捨てた石、「キリスト」を礎の土台石とする「**神の国**」の到来を今日真剣に待ち望んでいるのです。